

近畿皮膚科集談会 100 年への歴史探訪

前 編集主幹 土居敏明
(大阪大学皮膚科招聘教授)

はじめに

1980 (昭和 55) 年に皮膚科の研修医になった小生にとって、この 40 数年間の皮膚科の進歩は目覚ましいものがあります。例えば、尋常性乾癬においては、ステロイドの外用療法か光線治療に加えて、かろうじて内服の「チガソン」くらいしか選択肢がなかったのが、ビタミン D 製剤、免疫抑制剤の適応に加えて、近年、生物学製剤の登場により治療の選択肢と治療効果が大きく変わりました。それ以外の分野でもアトピー性皮膚炎や自己免疫性水疱症、各種膠原病の病態メカニズムが解明されつつあり、また、かつて不治の病と言われた悪性黒色腫は免疫チェックポイント阻害剤の登場により進行期でも一定のコントロールが可能な時代になりました。今後も、様々な分野において病態が解明されて、治療へと応用されてゆくことでしょう。人々は、どうしてもそのような目覚ましい進歩・発展に目を奪われがちですが、時には先人・先輩の行動や歴史にも目を向けることが大切です。

この点において、かねてから我が国の皮膚科学の開祖である土肥慶蔵先生の研究を続けてこられた済生会富田林病院の中川浩一先生が、吉川邦彦大阪大学名誉教授の発案により「本邦皮膚科学の足跡を辿る会」を発足されたことはご同慶に堪えません。

同じ昭和 30 年生まれの小生としても、近畿圏の皮膚科の歴史について記録を残しておくことで、いくばくかのお役に立つことができればと思います、10 数年前に第 100 回目の主催をさせていただいたご縁がある「近畿皮膚科集談会 (以下、集談会)」についてお話をしたいと思います。

1. 近畿皮膚科集談会の歴史を探る

2023 (令和 5) 年 7 月 30 日に第 116 回集談会 (主催：猿喰浩子先生) が開催されましたが、1927 (昭和 2) 年に創設されたため、2027 年の第 120 回をもって創設 100 周年を迎えることとなります。現在、年に 1 回 (7 月) 開催されている集談会が、100 年を迎える前に 100 回を越えていることに疑問を感じられた先生もいらっしゃるでしょう。その理由を説明するとともに、この 100 年近くの集談会の歴史を紐解いてゆきたいと思います。

まず、小生が主催を任されたのは 2007 (平成 19) 年の第 100 回で、その 3 年前の 2004 (平成 16) 年に会頭指名を受けました。当時の集談会は、現在のように大阪地方会、京滋地方会を兼ねてはならず、年 6 回の大阪地方会 (2, 3, 5, 7, 9, 12 月) と年 4 回の京滋地方会 (3, 6, 9, 12 月) とは別に、6 月前後の日曜日に一定規模以上の基幹病院が主催をする形で運営されていました。主催施設は、おおよそ大阪 2 : 京都 1 の割合で、輪番制

で選出されている状況でした。運営母体としては、各大学の教授や関連病院の部長を中心に30余名の世話人が、開催当日の昼食時に、合議制をもって今後の主催者などの選出をする形で行われていたようです。と、伝聞調なのは、2004年当時小生はまだ大阪労災病院の部長に着任したばかりで、正式に世話人になっておらず世話人会の詳細を存じ上げなかったためです。このため主催を任されたものの、どのようにしたらよいのかわからず、第92回を主催された小塚雄民先生、第95回の岡田奈津子先生、第97回の堀口裕二先生、さらに第98回を主催することになっていた井上千津子先生から情報を集めました。岡田先生によると、今までは会としての正式な規約もなく、母体もはっきりせず、製薬会社からの協賛を得るのが困難だったため、急遽規約を作られたとのことでした。会場として、岡田先生、井上先生が開催されたグランキューブ大阪を確保したいと考えたのですが、2007年に大阪で医学会総会が開催される影響で、会場確保に苦勞し、ようやく7月29日に10Fのフロアを確保できたと記憶しています。特別講演の演者は、小塚先生のアドバイスを受けて、当時ノーベル賞に最も近い研究者と言われていた大阪大学微生物研究所の審良（あきら）静男先生をお招きし、ランチオンセミナーには、大阪大学皮膚毛髪再生医学教授の板見智先生と同・准教授の乾重樹先生にお願いすることになり、骨格は定まりました。

一方、定例の学会として、主なものでも、総会、中部支部学会、地方会（大阪6回、京滋4回）に加えて集談会があり、かねてよりその存続自体に赤信号が出ていました。しかし、当時の歴代の大阪地方会運営委員長の吉川邦彦先生、宮川幸子先生、片山一朗先生、および京都大学の宮地良樹先生のご尽力もあり、第100回集談会から大阪地方会の7月の会を兼ねる形で、大阪地方会と京滋地方会の共同開催の形にすることが決まり、主催は大阪2：京滋1の形で、3の倍数の回は京滋主催、それ以外は大阪主催となりました（これは後述する「皮膚」と「皮膚科紀要」が、吉川先生と宮地先生のご尽力でそれぞれ発展的解消して、2002年から「皮膚の科学」に統合された流れの延長と思われます）。このような体制のおかげで、第99回以前を主催された先生方に比べ比較的楽な立場で運営をさせていただくことができました。

さて、回数がちょうど100回の節目だったので、その歴史を調べてまとめてみよう考えました。まず、創設のいきさつを示す手掛かりとして、1996（平成8年）の第89回集談会（主催：河村甚郎先生）のプログラムに掲載されていた京大名誉教授の山本俊平先生の「近畿皮膚科集談会の思い出」という文章の記述から、昭和2年ごろの春か秋に、京都大学の松本信一教授、大阪大学の佐谷有吉教授、京都府立医科大学の中川清教授が相談されて発足に至ったことが分かりました。さらに、1999（平成11）年の第92回集談会（主催：小塚雄民先生）のプログラムに掲載された、日本医事新報第275号（昭和2年11月12日発行）の記事「第1回近畿皮膚科泌尿器科集談会」の冒頭の「去る6日」という記載から、第1回は昭和2年11月6日に開催されたであろうと推定しました。さらに、1978（昭和53年）に編集された「大阪大学皮膚科同窓会誌－開講75周年記念－」において、佐野榮春教授が執筆された佐谷教授時代の記述の中に「佐谷教授は着任来、京大松本信一

教授、京都府立医大中川清教授と相計り、3 大学間の学問的交流と親睦をはかる目的で、近畿皮膚科泌尿器科集談会を創立し、1927(昭和2)年11月6日第1回集談会が京大楽友会館で開催された。その後、春秋2回、京都と大阪で交互に開かれていたが、戦後中部連合地方会の発足とともに春の1回となった。更に泌尿器科の分離に伴い近畿皮膚科集談会と改称されたが、今日に至るまで発足時の3教授の意向通り肩の張らない気楽な会としてユニークな存在を誇っている」との記載を認めました。すなわち、創設当時は、春と秋の年2回開催されていたのが、1950(昭和25年)から秋の集談会が、中部連合地方会となり、現在の中部支部学術大会の源流となったため、80年目に第100回を迎えることになった次第です。

以上のような経緯を第100回集談会のプログラムの冒頭に記すとともに、主催施設や主催者の一覧表を作り、大阪地方会をサポートしてくれている西田健樹氏に依頼して大阪地方会のHPに第100回集談会のコーナーを作ってもらい、そこに「100回のあゆみ」という形で掲載してもらいました。しかし、残念ながらその時点では、昭和4年の第5回から(戦争をまたいで)昭和39年の第57回までは、開催日も主催施設も主催者も空欄のままの不完全なものしか作成できず、100回のうち半分以上の歴史が不明でした。特に戦時中は、前後の回数から見て、3回分が中止されていると推定されましたが、どの時点で中断されて、戦後いつから再開されたのかも不明でした(Table.1)。

時は流れ、2021(令和3)年3月に小生は定年を迎え時間にゆとりができ、かすみかけた目も2023(令和5)年2月に白内障の手術を受けてはっきり見えるようになったため、この一覧表の空白を埋める宿題を果たすべき時が来たと思い立ち、退職の前年に招聘教授の任を授けていただいた大阪大学の藤本学教授に相談したところ「是非やってください」との言葉を頂きました。その言葉に意を強くして大阪大学の吹田キャンパスの生命科学図書館に通って、大正15年ごろからの「皮膚科紀要」(京都大学皮膚科教室編;1923(大正12)年創刊-1999(平成11)年94巻で休刊;2002(平成14)年創刊の本誌「皮膚の科学」の源流の一つ)を、1ページずつめくって、集談会に関する記載をチェックしてゆきました。当時の文体は漢字カタカナ混じりの文語体の文章(明治憲法のような感じ)で非常に読みにくいものでしたが、歴史の重みを感じつつチェックしてゆきました。

ちなみに、第1回の概要については、紀要10巻572頁に記載されています。

昭和2年11月6日(日曜日)午後ノ1時ヨリ京大楽友会館ニテ開催。演題ハ別項ノ如ク20。参会者京阪神ノ同学者80名ヲ超エ非常ノ盛会デアッタ。講演終了後、晚餐ヲ共ニシタ。席上松浦、櫻根、佐谷、中川、松本清博士ハ交々立ッテ、本集談会成立ニ至ル経緯、盛会ニ対スル祝賀辞、今後ノ希望等ヲ開陳セラレ、参会者亦各腹藏ナキ懇談ヲ交シ和氣藹藹裡ニ9時散会シタ。

第一題 蛇毒ニ及ボス「クロール、カルチウム」ノ影響ニ就テ (以下略)

1941(昭和16)年の太平洋戦争の開戦までは、比較的良質の紙が使われていて、抄録の

記載内容にも余裕が見られました。しかし、開戦以降は徐々に粗悪な紙となり、無造作に扱うとボロボロと崩れそうな紙に印刷されていました。1944（昭和 19）年に発行された第 43 巻は 1 号と 2 号のみで、その後は欠号し、1949（昭和 24）年に発行された第 45 巻の前に刊行されたはずの第 44 巻は欠巻のため、いつ刊行されたかさえ不明でした。さらに終戦後は紙不足のため、論文の本編を掲載するのが精いっぱい、昭和 24 年から 29 年にかけて抄録が見つからない年が続きました。そのため戦前の調査は比較的順調に進んだのですが、大戦中および終戦後の紙不足の期間は、どうしても空白を埋めることができませんでした。欠号の部分がどこかに存在していないか吹田キャンパスの図書館司書の方に照会したところ、「国会図書館には登録されていないが、京大図書館にはあるかもしれない」とのことでした。

そこで、「皮膚」誌（大阪大学皮膚科教室編、のち大阪地方会編；1959（昭和 34）年創刊-2001（平成 13）年 43 巻で終刊；2002（平成 14）年創刊の「皮膚の科学」の源流の一つ）および「皮膚科紀要」の両方の編集に関与された、堀口裕治先生にメールをして、「紀要」の欠号の部分や昭和 20 年代の集談会に関するプログラムなどの資料が京大に残っていないか調べていただけないかとお願いました。しかし、堀口先生からは「残念ながら、京大はその間に教授も何代か交代し、教室も引っ越しをしたために古い資料は残っていないだろう」とする一方で、教室秘書の西澤（谷崎）順子さんを紹介していただきました。彼女から、京大図書館に保存されていた、「紀要」第 43 巻 1-4 号と 1948（昭和 23）年に発行された第 44 巻の目次の PDF を送っていただきました。これにより第 44 巻には集談会の抄録はないが、第 43 巻 3 号に第 33 回集談会の抄録が掲載されており、その記載により、開催日は 1948（昭和 18）年 11 月 14 日、主催は京大で京大皮膚科講堂にて開催されたことが確認できました。

2. 主催施設と主催者を確定するための歴代教授の在任期間の調査

このようにして抄録を見つけても、抄録は開催日と会場の記載のみで、主催施設や主催者の記載がないものが大半でした。仮に主催施設が分かっても、当時の主催者（教授）がどなたなのか不明でした。まず、創設に関わった三大学（阪大、京大、京府医大）の歴代主任教授の在任期間を調査することにしました。大阪大学は前述の開講 75 周年記念誌などの記載から、京都大学は教室 HP の情報と秘書の西澤さんから、京都府立大学は、大阪地方会の秘書の光山（松本）久実子さんを通じて秘書の吉村菜穂さんから、それぞれの教室の歴代教授の在任期間の情報を得ることができました。さらに、戦後は三大学以外の大学や基幹病院が主催をしていることが分かり、この際、調査の範囲を拡張して、近畿圏にある 12 の大学医学部・医科大学皮膚科すべての歴代教授の在任期間の一覧表を作っておくと今後の役に立つのではないかと思い、調査することにしました。また、創設からの歴史が長い大学では施設名称の変更もあるため、その変遷に関しても調査しました。

一部の大学は HP の情報から、歴代教授のお名前および在任期間を把握することができ

ましたが、大半は手掛かりがありませんでした。そこで、大阪公立大学の鶴田大輔先生には光山さんを通じて調査を依頼し、それ以外の8大学については、不躰ながら、各大学皮膚科主任教授宛てにメールを送り、調査の主旨を説明して、ご協力をお願いをしました。すべての教授から情報の提供をいただき、一部は○年までの情報までしか得ることができませんでしたが、大半は○年○月までの情報が判明しました。

3. 抄録がない終戦後から昭和39年までの空白部分の調査

前項で調査した、各大学皮膚科の沿革や歴代教授の在任期間に関しては後述することにして、再度、集談会の歴史探訪の話に戻ります。

「紀要」を調査し終えた時点で、第41回(1949(昭和24)年)から第57回(1964(昭和39)年)の期間を除いて、おおむね空欄を埋めることができましたが、残された空欄を埋める調査は暗礁に乗り上げました。他方、凝り性の小生は、「歴代教授の在任期間の月単位が不明な先生に関して、何とかそれを確認する手段はないか?」と考えた結果、古い日皮会誌や皮膚誌を検索して、追悼文を見つけてその略歴から就任・退任年月を確認できるかもしれないと考えました。しかし、夏の暑さに体調を崩して調査は一旦中断しました。

涼しくなって調査を再開し、まず、皮膚誌を創刊号からチェックして追悼文を探し始めました。その過程で、第4巻1号(昭和37年2月発行)に掲載された資料群に目が留まりました。そこには櫻根太郎先生が、「第150回大阪地方会」の講演資料として150回までの大阪地方会をまとめた一覧表が掲載されていました。大阪地方会の黎明期の歴史についての資料があることは、「皮膚」の最終号(43巻6号398-405)の記事によって存じ上げてはいましたが、その資料群の中に第1回から第54回までの集談会の開催日、主催施設(会場)、抄録の掲載誌に関する一覧表が存在することは予想外でした。まるで、遠くまで出かけて青い鳥を探しても見つからなかったのが、実はすぐ身近にいたような気持ちでした。60年前に櫻根太郎先生がまとめてくれていたことに感謝感激です。ただし、この一覧表には、第33回の記載が欠落していて、この一覧表を作成した際に、「紀要」43巻3号の抄録の存在に気づくことができなかつたようです。この空白部分を埋めてくれた京大の西澤さんに改めて感謝です。さらに有難いことに「皮膚」第7巻3号(昭和40年8月発行)には、追加資料として、第55-57回までの集談会のデータが追加されており、残された空欄のうち、主催者欄以外を完全に埋めることができました。なお、国立大阪で開催された第54回的主催者は、皮膚3巻1号に添付されたチラシに「主催：志水靖博」との記載があり確定することができました。

ただし、櫻根先生の資料において不明確な点があります。それは第14回集談会(昭和9年、開催地奈良)と第22回集談会(昭和13年、開催地和歌山)を、櫻根先生はそれぞれ奈良医大、和歌山医大の主催としてカウントしている点です。小生の調査によると当時はまだ両県に医学部・医科大学は存在していなかつたはずですが。以前、古い紀要を調べていた時に、「紀要」23巻5号465頁の第14回集談会の概要文として、「昭和9年5月27日

午後 1 時ヨリ奈良市公會堂ニテ舉行シタ。従来近畿集談會ハ京都ト大阪トデ交互に開會サレルノガ常デアッタガ、此度新緑ノ古都奈良ニ於テ遊覽ヲ兼ネテ行ハレタ事ハ、集談會ノ意義ヲ一層深カラシメタモノト云ヘヤウ。午前 9 時大軌電鐵奈良驛ニ集合。ソレヨリ第 1 班ハ奈良高師小島教授ノ案内デ帝室博物館、戒壇院、東大寺三月堂ノ古美術ヲ鑑賞シ、第 2 班ハ自動車ニテ……」とありました。午前中は観光を楽しんだ後、午後は学会で勉強をしたということを示しています。この中で、奈良高師は奈良女子高等師範学校（現、奈良女子大学）を指すと考えられ、医師ではなく学校の先生の育成機関と推定されます。第 22 回の和歌山についての記載は不明ですが、いずれも春の開催であり、大阪大学の主催だったのではないかと推測します。ただし、第 15 回は神戸県立病院（神戸大の前身）の主催で神戸にて開催、第 25 回は大阪女子高等医専（関西医大の前身）の主催で京都にて開催されていることから、奈良、和歌山も、現地の有力な基幹病院が主催した可能性は否定できません。読者の中に、戦前の奈良、和歌山の医学教育機関、基幹病院に関する情報をお持ちの先生がいらっしゃいましたらご教授お願いします（※）。

この点に関しては一旦保留し、前述の各大学皮膚科歴代教授の在任時期を勘案した上で、第 1 回から第 116 回までの集談会の一覧表が完成しました（Table.2）。なお、主催施設の欄はできるだけ当時の名称で記載しています。第 2、4、6 回の「大阪医科大学」は大阪大の前身、第 15 回の「神戸県立病院」と第 53 回の「県立神戸医科大学」は神戸大の前身、第 25 回の「大阪女子高等医専」は関西医大の前身、第 41 回の「大阪市大」は大阪公立大の前身、第 42、48 回の「大阪医大」は大阪医科薬科大の前身です。

主催施設、年間開催回数、共催の有無などにより、全体を 4 期に分けることができます。

第 1 期 第 1 回～40 回（昭和 2～24 年）：創設に関わった三大学の輪番制で、春（大阪）と秋（京都）に年 2 回開催（例外は第 14、15、22、25、41、42 回）

第 2 期 第 41 回～74 回（昭和 25～56 年）：近畿圏の 12 大学や基幹病院で年 1 回開催

第 3 期 第 75 回～99 回（昭和 57～平成 18 年）：基幹病院の主催で年 1 回開催

第 4 期 第 100 回～（平成 19 年～）：基幹病院の主催、大阪京滋地方会共催で、年 1 回開催（なお、第 113～116 回の WEB+は Cov19 感染流行による対処であることを、後年にこれを読む読者のために記しておく）

（※）：校正中に古川福実先生から和歌山医大の前身に関して、以下のような貴重な追加情報を頂きました。

「和歌山県皮膚科医会の HP に、『会長は、初代上原信章先生から西村長応先生、出来利夫先生、晒義廣先生、瀬川陽一先生、森庸亮先生、小倉治雄先生、宮崎孝夫先生であり、私（上出康二先生）で 9 代目です。』との記載があり、和歌山医大第二外科の HP の教室の歴史に、『紀州和歌山には古くから藩校としての医学校があり、良医を育成してきた歴史があります。第 10 代紀州藩藩主の徳川治宝公は学問を奨励し、なかでも医学を藩学の中核に置いて 1792 年に藩立の医学館を創設し、地域医療の充実を図りました。華岡青州（世界で最初に全身麻酔下に

外科手術を行った和歌山県を代表する医師)や本居宣長も藩校医学館で講義を担当していました。そして医学館は、明治時代の和歌山医学校へと続いていき、和歌山県立医科大学の前身でもある和歌山県立医学専門学校の附属病院になった和歌山市立市民病院へと歴史が引き継がれていきます。』との記載があります。それらの記載から、戦前に和歌山で開催された第22回の集談会の主催が和歌山市立市民病院で、主催者が上原信章先生であった可能性が示唆されますが、残念ながら上原先生が同病院の当時の皮膚泌尿器科部長であったかどうかの確認が得られないため断定はできません。」とのこと。

医学校の源流(1792年)が適塾(1839年)よりも古いとは、さすが徳川御三家で、八代将軍以降の徳川宗家を引き継いだ紀州藩ですね。さて、奈良県立医大の母体となった医学校・病院の存在もあるはずですが、それは将来の課題として残しておきたいと思います。

4. 近畿圏の12大学医学部・医科大学皮膚科の沿革と歴代教授の在任期間の調査結果

さて改めて、近畿圏にある12大学医学部・医科大学皮膚科の沿革と歴代教授の在任期間についての調査結果を記したいと思います。12の大学は、次のように4つに分類することができます。

- (1) 源流が江戸末期～明治期にある京都府立医大、京都大、阪大、神戸大の4校。
- (2) 昭和初期に高等医専として開校された大阪医科薬科大と関西医大の2校。
- (3) 大戦末期に開校された和歌山医大、大阪公立大、奈良県立医大の3校。
- (4) 昭和47-49年に開校された兵庫医大、滋賀医大、近畿大の3校。

皮膚(泌尿器)科開講の早い順にその施設および皮膚科の沿革と歴代教授の在任期間についてまとめてみました。なお、戦前、特に明治初期～大正期は、情報が交錯しており、参考にした情報によって差異がみられる点、ご容赦いただきたいと思います。明らかな間違いにお気づきの場合、ご指摘いただけますと幸甚です。

- (1) 源流が江戸末期～明治期にある4校
 - a) 京都府立医科大学皮膚科の沿革(皮膚科・泌尿器科の分離時期不明)
12大学中、皮膚科の開講が最も早い。
1872(明治5)年○月 京都療病院開院
1879(明治12)年○月 京都府立医学校併設
1897(明治30)年1月 皮膚科開講
同年1月 初代:江馬章太郎教授就任
1903(明治36)年○月 京都府立医専に改称
1921(大正10)年○月 京都府立医科大学に改称

〔歴代教授の在任期間〕

初代:江馬章太郎(1897年1月～1914年7月)

- 2代：佐谷 有吉 (1914年8月～1918年1月) 8年後大阪大へ
- 3代：中川 清 (1918年2月～1947年10月)
- 4代：片岡 八束 (1947年10月～1954年11月)
- 5代：岩下 健三 (1955年12月～1968年3月)
- 6代：外松 茂太郎 (1968年7月～1985年3月)
- 7代：安野 洋一 (1985年8月～2001年3月)
- 8代：岸本 三郎 (2002年2月～2009年3月)
- 9代：加藤 則人 (2009年8月～現在に至る)

b) 京都大学医学部皮膚科の沿革

- 2番目に皮膚科の開講が早い。7帝大の一つ。
- 1897(明治30)年6月 京都帝国大学 開設
- 1898(明治31)年〇月 京都帝国大学に医科大学 開設
- 1899(明治32)年〇月 皮膚科学講座設置
(外科：猪子止戈之助教授兼任)
- 1900(明治33)年12月 初代：松浦 有志太郎教授就任
- 1919(大正8)年2月 分科大学を学部と改称(医学部発足)
- 1934(昭和9)年〇月 泌尿器科学講座が分離新設
- 1939(昭和14)年5月 臨時医学専門部設置
- 1947(昭和22)年10月 京都帝国大学を京都大学と改称
- 1949(昭和24)年5月 新制 京都大学 設置
- 1951(昭和26)年3月 臨時医学専門部廃止
- 2004(平成16)年4月 独立行政法人 国立病院機構に移管

〔歴代教授の在任期間〕

- 初代：松浦 有志太郎 (1900年12月～1919年10月)
- 2代：松本 信一 (1919年11月～1944年12月) 初代皮膚科専任教授
- 3代：山本 俊平 (1945年7月～1961年11月)
- 4代：太藤 重雄 (1962年4月～1979年10月)
- 5代：今村 貞夫 (1980年6月～1997年7月)
- 6代：宮地 良樹 (1998年6月～2014年9月)
- 7代：梶島 健治 (2015年6月～現在に至る)

b) 大阪大学医学部皮膚科の沿革

- 源流を江戸時代までさかのぼることができる。7帝大の一つ。
- 1839(天保9)年〇月 適塾開塾

1870 (明治 3) 年〇月 大阪医学校 開校
 1880 (明治 13) 年 3 月 大阪府立医学校に改称
 1903 (明治 36) 年 1 月 皮華科開講
 同年 1 月 初代：櫻根 孝之進教授就任
 1904 (明治 37) 年 11 月 大阪府立高等医学校
 1915 (大正 4) 年 10 月 大阪府立医科大学に改称
 1919 (大正 8) 年 11 月 大阪医科大学に改称
 1926 (大正 15) 年〇月 皮膚科泌尿器科に改称
 同年 11 月 2代：佐谷有吉教授就任
 1931 (昭和 6) 年 5 月 大阪帝国大学医学部に改称
 1939 (昭和 14) 年 5 月 臨時医学専門部設置
 1941 (昭和 16) 年 12 月 皮膚科と泌尿器科に分離後も医局は合同
 佐谷 有吉：主任教授、兼泌尿器科講座担当
 谷村 忠保：皮膚科講座担当
 1946 (昭和 21) 年 3 月 佐谷教授退任
 1946 (昭和 21) 年 5 月 3代：谷村忠保教授就任 (泌尿器科兼任)
 1951 (昭和 26) 年 3 月 臨時医学専門部廃止
 1955 (昭和 30) 年 3 月 谷村先生退任
 1956 (昭和 31) 年 7 月 4代：藤浪得二教授就任 (皮膚科専任)
 1947 (昭和 22) 年 10 月 国立大阪大学医学部に改称
 2004 (平成 16) 年 4 月 独立行政法人 国立病院機構に移管

〔歴代教授の在任期間〕

初代：櫻根 孝之進 (1903 年 1 月～1926 年 10 月)
 2代：佐谷 有吉 (1926 年 11 月～1946 年 3 月)
 3代：谷村 忠保 (1946 年 5 月～1955 年 3 月)
 初代：皮膚科教授 (泌尿器科兼任)
 4代：藤浪 得二 (1956 年 7 月～1973 年 3 月) 初代皮膚科専任教授
 5代：佐野 榮春 (1974 年 4 月～1984 年 3 月)
 6代：吉川 邦彦 (1985 年 1 月～2003 年 3 月)
 7代：片山 一朗 (2004 年 3 月～2018 年 3 月)
 8代：藤本 学 (2019 年 2 月～現在に至る)

c) 神戸大学医学部皮膚科の沿革

明治初期に開設された神戸病院を母体に、大戦末期に医専として設立された。

1869 (明治 2) 年〇月 神戸病院設置

1877 (明治 10) 年〇月	公立神戸病院に改称
1882 (明治 15) 年〇月	県立神戸病院に改称
1926 (大正 15) 年〇月	皮膚科開設
1929 (昭和 4) 年〇月	皮膚泌尿科と改称
1935 (昭和 10) 年 7 月	皮膚泌尿器科 上月 実部長就任
1944 (昭和 19) 年 1 月	兵庫県立医学専門学校設置
1946 (昭和 21) 年 10 月	(旧制) 県立神戸医科大学設置
1948 (昭和 23) 年 3 月	初代：皮膚泌尿器科 上月 実教授就任
1952 (昭和 27) 年〇月	(新制) 県立神戸医科大学設置
1962 (昭和 37) 年 8 月	皮膚科、泌尿器科が分離独立
同年同月	初代皮膚科専任：佐野 榮春教授就任
1964 (昭和 39) 年〇月	国立移管：神戸大学医学部
2004 (平成 16) 年 4 月	独立行政法人 国立病院機構に移管

〔歴代教授の在任期間〕

皮膚泌尿科 (1948 年 3 月設置)

初代：上月 実 (1948 年 3 月～1962 年 8 月)

分離後泌尿器科専任

皮膚科 (1962 年 8 月設置)

初代：佐野 榮春 (1962 年 8 月～1974 年 7 月)

(1974 年 4 月～1974 年 7 月) 阪大教授兼職

2 代：三島 豊 (1975 年 9 月～1992 年 3 月)

3 代：市橋 正光 (1992 年 8 月～2003 年 3 月)

4 代：錦織 千佳子 (2003 年 4 月～2021 年 3 月)

5 代：久保 亮治 (2021 年 8 月～現在に至る)

- (2) 昭和 2 年に開校された大阪高等医専 (現大阪医科薬科大) と昭和 3 年に開講された大阪女子高等医専 (現関西医大) の 2 校は、兄妹のような関係であろう。

a) 大阪医科薬科大学皮膚科の沿革

1927 (昭和 2) 年 4 月	大阪高等医学専門学校設置
1929 (昭和 4) 年〇月	佐谷有吉 阪大教授が嘱託勤務
1930 (昭和 5) 年 5 月	皮膚泌尿器科開講
1931 (昭和 6) 年 6 月	初代：三内健治教授就任 (皮膚泌尿器科)
1946 (昭和 21) 年〇月	財団法人 (旧制) 大阪医科大学に改称
1951 (昭和 26) 年〇月	学校法人大阪医科大学認可 (組織変更)
1952 (昭和 27) 年〇月	(新制) 大阪医科大学設置

1956（昭和 31）年〇月 皮膚科と泌尿器科の分離・独立
2016（平成 28）年〇月 学校法人大阪薬科大学との法人合併
2021（令和 3）年〇月 大阪医科薬科大学に改称

〔歴代教授の在任期間〕

初代：三内 健治 （1931 年 6 月～1939 年〇月）皮膚泌尿器科
2 代：栗原 善夫 （1939 年 10 月～1973 年 3 月）初代皮膚科専任教授
3 代：安原 稔 （1974 年 7 月～1993 年 3 月）
4 代：清金 公裕 （1993 年 4 月～2009 年 3 月）
5 代：森脇 真一 （2009 年 4 月～現在に至る）

b) 関西医大皮膚科の沿革

1928（昭和 3）年 6 月 大阪女子高等医学専門学校開校
1932（昭和 7）年 4 月 附属病院設置（皮膚泌尿器科開講）
同年同月 初代：山本 俊平教授就任
1947（昭和 22）年〇月 （旧制）大阪女子医科大学に改称
1954（昭和 29）年〇月 （新制）関西医科大学（共学）設置
1960（昭和 35）年〇月 皮膚科と腎泌尿器外科が分離・独立

〔歴代教授の在任期間〕

初代：山本 俊平（1932 年 4 月～1945 年 8 月）1945 年 7 月京大へ
（1945 年 7 月～8 月 5 日まで京大教授と兼任）
2 代：速水 伸三（1945 年 7 月～1958 年 6 月）
（1945 年 7 月 1 日～8 月 5 日まで山本先生と重複）
3 代：大原 一枝（1958 年 9 月～1971 年 7 月）初代皮膚科専任教授
4 代：朝田 康夫（1971 年 9 月～1994 年 3 月）
5 代：堀尾 武（1994 年 8 月～2007 年 3 月）
6 代：岡本 祐之（2007 年 4 月～2020 年 3 月）
7 代：谷崎英昭（2020 年 4 月～現在に至る）

- (3) 大戦末期の昭和 19～20 年、緊急に軍医を養成するために開校された和歌山医大、大阪公立大、奈良県立医大の 3 校の創設時の名称は、それぞれ和歌山県立医学専門学校（和歌山県立医専）、大阪市立医学専門学校（大阪市立医専）、奈良県立医学専門学校（奈良県立医専）でした。前述の神戸大学医学部の母体となった兵庫県立医学専門学校（兵庫県立医専）の設立も昭和 19 年であり、このグループに含めるべきかもしれませんが、兵庫県立医専には、前身として県立神戸病院が明示されてい

るため(1)のグループに分類しました。

a) 和歌山県立医科大学皮膚科の沿革

皮膚科開講は、昭和20年11月1日との記録もありますが、古川先生の情報では昭和20年6月とされているので、こちらを採用しました。

1792(寛政4)年	藩立医学館設立
明治期	和歌山医学校
戦前	和歌山市立市民病院(上原信章先生?)
1945(昭和20)年2月	和歌山県立医学専門学校開校
1945(昭和20)年6月	皮膚泌尿器科開講
1945(昭和20)年6月	初代 西村長應教授就任
1948(昭和23)年2月	(旧制)和歌山県立医科大学設置
1952(昭和27)年2月	(新制)和歌山県立医科大学設置
1964(昭和39)年7月	皮膚科と泌尿器科が分離
2006(平成18)年4月	公立大学法人化

〔歴代教授の在任期間〕

- 初代：西村長應(1945年6月～1967年3月) 初代皮膚科専任教授
- 2代：三島 豊(1967年12月～1975年8月) 神戸大学へ
- 3代：青木和夫(1976年1月～1993年3月)
- 4代：松中成浩(1993年5月～1999年3月)
- 5代：古川福実(1999年8月～2017年3月)
- 6代：神人正寿(2017年7月～現在に至る)

b) 大阪公立大学医学部皮膚科の沿革

皮膚泌尿器科の開講は、昭和21年2月26日で、初代は原田兵蔵先生との記録もあるが、櫻根進一先生を初代とする方を採用した。

1944(昭和19)年4月	大阪市立医学専門学校開校
1945(昭和20)年〇月	皮膚泌尿器科学 初代：櫻根進一教授就任
1946(昭和21)年2月	2代：原田兵三教授就任
1947(昭和22)年〇月	(旧制)大阪市立医科大学に昇格
1948(昭和23)年〇月	皮膚泌尿器学講座開講
	3代：櫻根好之助教授就任
1952(昭和27)年〇月	(新制)大阪市立医科大学となる
1955(昭和30)年〇月	大阪市立大学に医学部として編入
1961(昭和36)年5月	4代：田村峯雄教授就任

1963（昭和 38）年 4 月 皮膚科と泌尿器科に分離
5 代：齊藤忠夫教授（初代皮膚科専任教授）
（田村教授は泌尿器科専任へ）
2006（平成 18）年〇月 公立病院法人化
2022（令和 4）年〇月 大阪公立大学となる

〔歴代教授の在任期間〕

初代：櫻根進一（1945 年〇月～1946 年 月）
2 代：原田兵三（1946 年 2 月～1948 年 月）
3 代：櫻根好之助（1948 年 7 月～1961 年 月）
4 代：田村峯雄（1961 年 5 月～1963 年 3 月）
5 代：齊藤忠夫（1963 年 4 月～1979 年 3 月）初代皮膚科専任教授
6 代：濱田稔夫（1979 年 4 月～1995 年 3 月）
7 代：石井正光（1995 年 4 月～2013 年 3 月）
8 代：鶴田大輔（2013 年 4 月～現在に至る）

c) 奈良県立医科大学皮膚科の沿革

皮泌科開講は昭和 21 年 3 月 15 日との記録がある。

1945（昭和 20）年 4 月 奈良県立医学専門学校開校
1946（昭和 21）年 3 月 皮泌科開講 責任者；石川昌義（教授囑託）
1947（昭和 22）年 4 月 （旧制）奈良県立医科大学に改称
1949（昭和 24）年〇月 皮泌科 石川昌義教授就任
1952（昭和 27）年 4 月 （新制）奈良県立医科大学となる
1963（昭和 38）年 11 月 皮膚科と泌尿器科が分離
同年同月 坂本邦樹教授就任（初代皮膚科専任）
2007（平成 19）年 4 月 公立病院法人化

〔歴代教授の在任期間〕

皮泌科

石川昌義（1949 年〇月～1963 年 10 月）

皮膚科

初代：坂本邦樹（1963 年 11 月～1989 年 3 月）
2 代：白井利彦（1989 年 4 月～2000 年 3 月）
3 代：宮川幸子（2000 年 9 月～2007 年 3 月）
4 代：浅田秀夫（2007 年 5 月～現在 ）

(4) 1961 (昭和 36) 年に成立した国民皆保険制度により、医療需要の急激な増加が予想されたため、1970 年代に全国で 34 校の医学部が創設された。近畿圏では、兵庫医大 (1972 年開校)、滋賀医大、近畿大 (1974 年開校) の 3 校がこのグループに含まれる。

a) 兵庫医科大学皮膚科の沿革

1972 (昭和 47) 年 4 月 兵庫医科大学開学
1973 (昭和 48) 年 4 月 皮膚科開講 初代：藤浪 得二教授就任
2022 (令和 4) 年 4 月 兵庫医療大学と統合して、新・兵庫医科大学

〔歴代教授の在任期間〕

初代：藤浪 得二 (1973 年 4 月～1977 年 3 月)
2 代：相模 誠一郎 (1977 年 4 月～1993 年 3 月)
3 代：喜多野 征夫 (1993 年 10 月～2003 年 3 月)
4 代：山西 清文 (2003 年 12 月～2020 年 3 月)
5 代：金澤 伸雄 (2020 年 10 月～現在に至る)

b) 滋賀医科大学皮膚科の沿革

1974 (昭和 49) 年 4 月 国立滋賀医科大学開学
1978 (昭和 53) 年 4 月 皮膚科開設
同年同月 初代：渡邊 昌平教授就任
2004 (平成 16) 年 4 月 独立行政法人 国立病院機構に移管

〔歴代教授の在任期間〕

初代：渡邊 昌平 (1978 年 4 月～1991 年 3 月)
2 代：上原 正巳 (1991 年 4 月～2003 年 3 月)
3 代：田中 俊宏 (2004 年 3 月～2020 年 3 月)
4 代：藤本 徳毅 (2020 年 7 月～現在に至る)

d) 近畿大学医学部皮膚科の沿革

1949 (昭和 24) 年〇月 大阪専門学校と大阪理工科大学を母体として
近畿大学設立
1974 (昭和 49) 年〇月 近畿大学に医学部を設置
1975 (昭和 50) 年 4 月 皮膚科開講
同年同月 初代：手塚 正教授就任

〔歴代教授の在任期間〕

初代：手塚 正（1975年4月～2004年3月）

2代：川田 暁（2004年4月～2021年3月）

3代：大塚篤司（2021年4月～現在に至る）

以上、現時点での調査結果をまとめてみました。いまなお不明な部分や各教室に記録されている情報と異なっている場合もあるかと思われ、藤本 学先生から頂戴した宿題の答えとして十分なものとは言えないかもしれませんが、このデータをたたき台にし、さらに読者の皆様からの情報を追加して、より充実したものにできれば、将来何かの役に立つのではないかと考えます。

なお、吉川邦彦先生から、阪大や京大には、戦時中に「専門部」が併設されたはずであるとのこと指摘を頂き、阪大キャンパスにある同窓会館の歴史資料館を訪ねました。1939（昭和14）年5月15日に軍医の不足を補うために勅命により七帝大（東京、京都、東北、九州、北海道、大阪、名古屋）と旧六医大（千葉、金澤、新潟、岡山、長崎、熊本）に臨時医学専門部を配置。1校あたり150名を定員とし、男子学生のみを入学させることにより、約2000名の医師増員が図られたとのことです。大阪大専門部の卒業生のうち180名が戦死され、内145名の戦没地が判明しており、分布地図が資料館に展示されていました。昭和19年に神戸、奈良、和歌山、大阪などに医専が設置され、増員された医師が戦地に派遣され、その多くが帰らぬ人となりました。平時であれば、3、40年間医学の研究や診療に活躍されたはずなのに、無念であったろうと思われまます。英霊に合掌。

最後にこの調査に協力いただいた、大阪公立大学：鶴田大輔先生、奈良医大；浅田秀夫先生、大阪医科薬科大学；森脇真一先生、神戸大学；久保亮治先生、関西医大；谷崎英昭先生、和歌山医大；神人正寿先生、兵庫医大；金澤伸雄先生、近畿大学；大塚篤司先生、滋賀医大；藤本徳毅先生におかれましては、ご多忙中にもかかわらず、情報の調査・ご提供ありがとうございます。また、京都大学の椛島健治先生、京都府立医科大学の加藤則人先生におかれましては、それぞれの教室の秘書様からの情報提供ありがとうございます。さらに、大阪大名誉教授の吉川邦彦先生、和歌山医大名誉教授の古川福美先生、関西医大名誉教授の岡本祐之先生、並びに大阪大学教授の藤本 学先生からも、教室史や歴代教授在任期間についての貴重な情報をご提供いただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。また、秘書の光山久実子さん（大阪地方会）、西澤順子さん（京都大）、吉村菜穂さん（京都府立医大）、そして、この拙文中に登場したすべての先生方に深謝申し上げます。

追記 1：今回の調査の過程で、大阪地方会の回数に関して、その回数カウント

がファジーであるという事実が見つかりました。先日の第 500 回の記念大会の懇親会に出席された先生は、吉川邦彦先生からその事実の一端を聞いたと思いますが、その件に関しては、また、機会がありましたら、報告させていただこうと思います。

追記 2：戦前に和歌山で開催された第 22 回の抄録を調べて、主催者の手掛かりになる情報がないか再検討してみました。その結果、演題 51 題のうち、大阪の施設が 34 題、京都の施設が 16 題、和歌山の施設は 1 題でした。和歌山の 1 題は滋野左右吉先生がご発表されており、残念ながら上原信章先生のお名前を見つけることはできませんでした。

一方、奈良開催の第 14 回の演題は、大阪の施設と京都の施設からの演題のみでした。

Fig2 の、第 14 回の主催は、「大阪帝国大学?」、主催者は「佐谷有吉?」

第 22 回の主催は、「和歌山市民病院?」、主催者は「上原信章?」としておきます。